

けしん おうごん さめ  
化身した黄金の鮫

むかし、むかしそのむかし、いわきの国の東のはしの大きな村（鮫川村のこと）に中野という長者の夫婦がすんでいました。このあたりの田畑はみんなこの夫婦のもので、なにひとつ不自由なく、くらしていましたが、どうしたわけか、この夫婦には、子どもができませんでした。

それで、子どもをさずけてくださるようにと、村の氏神様にいっしょうけんめいにおいのりしました。長者夫婦のま心が通じたものか、やがて美しい女の子が生まれました。

その女の子には、紀美という名がつけられました。そしてちょうよ花よど、長者夫婦にかわいがられてそだてられました。16才になった紀美はたいへん美しく、長者の紀美といえば、近所の人はもちろん、遠く、岩代の国までも知れわたり、だれひとり、知らぬものはないほど、ひょうばんになりました。

ところが、まもなく、「このごろ長者さんのむすめさんは、なんだか元気がなく、顔色がわるくなったようだ。」といううわさがたちはじめました。

うわさがほんどうになり、月日がたつにしたがって、紀美はみょうにふさぎこんで、人々の目をさけ、一日中なやのかたすみで、すすりないていることが多くなりました。

やがて、長者夫婦も、紀美のようすがかわったことに気づき、悪い病気にかけたのではないかと、医者にかけ

